

Title	<学術講演会記録>特別講演癌の化学療法
Author(s)	太田, 和雄
Citation	京都大学結核胸部疾患研究所紀要 (1976), 9(1/2): 68-68
Issue Date	1976-03-30
URL	http://hdl.handle.net/2433/52221
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

癌の化学療法

愛知県がんセンター 第2内科, 化学療法部

太田 和雄

癌の化学療法はあたかも結核の化学療法の後を追って進歩してきた感がある。すぐれた新制癌剤の開発は基本的に重要であるが、制癌剤の投与法の研究が臨床的には重要な課題であり、特に今日の癌の化学療法の臨床において、多剤併用療法は first choice の治療法として広く用いられている。多年にわたり、多剤併用療法の基礎的、臨床的研究に従事してきたので述べた。特に L 1210 マウス白血病においてみつけた mitomycin C, 5FU, cytosine arabinoside の3者併用 MFC を臨床的に応用し、胃腸の癌にすぐれた効果を得た。また MFC は腺癌系に対し有効であることは肺癌の中でも腺癌に特にすぐれた効果があり、転移性肺腫瘍の中でも、胃、腸癌からの転移はもちろんのこと、子宮体部癌、乳癌の肺転移にもすぐれた効果を発揮した。多剤併用療法でも組織型別の適応が考えられ、肺の扁平上皮癌には METT (Mitomycin C, Endoxan, Thio-TEPA, Toyomycin) による4者併用が有効であり、肺の小細胞性未分化癌には METVFC (Mitomycin C, Endoxan, Toyomycin, Vincristine, 5FU, Cytosine arabinoside) がもっとも有効であった。特に肺癌の first

choice の治療法として用いている METT と放射線と同時併用療法は90%近い奏効率を示し、60%が著効を示した。しかもいずれの組織型にもすぐれた効果を示した。

近年癌の免疫療法として注目されている溶連菌製剤 OK-432 の作用機構を研究する目的で、肺癌、胃癌の癌性胸膜炎の腹腔内に投与して、胸水中の細胞の変化について経時的に追求した。OK-432 注入直後、好中球、マクロファージの浸出が著明で、ついで癌細胞が崩壊し始め、時に変性した癌細胞に好中球、リンパ球が付着しているのがみられ、ついで好中球、癌細胞は消失し、リンパ球が増加する。あたかも BCG 療法における炎症によるまき込み効果に相当する所見がみられた。OK-432 の癌性胸膜炎に対する効果は著しく、諸種制癌剤に耐性となった症例に OK-432 単独ですぐれた臨床効果が得られたものがあり、胸水のすみやかな減少、消失、癌細胞の消失は臨床的に有用な治療法である。また多剤併用療法に OK-432 を筋注で長期投与することによって、免疫化学療法として応用できる可能性について述べた。